



和漢文探

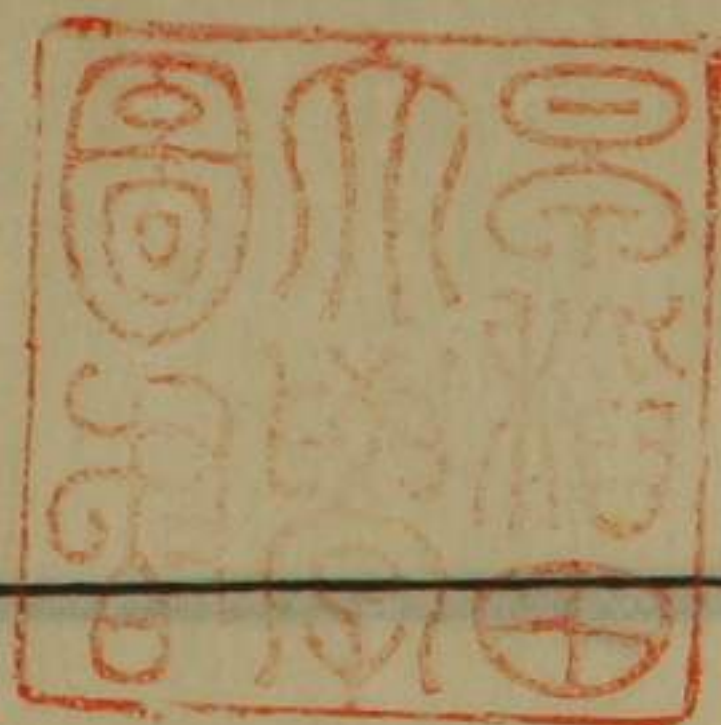
詩類
歌類
舞類

二

5
81
2



和漢文採卷之二



和漢文採卷之二

○詩類

附序

△大和真名詩序

並贊

東華坊



頃日撰分獅子庵之文庫^{ラトテ}並檢燈^{スル}花
詩^ヲ叢^ラ了^リ則^チ從^リ歌行詞曲之題類^ヲ雜^シ五言
七言之律詩^ヲ而大槩有^ラ二百余首^ト要^ス乎
去^レ者從^リ延寶之中^ニ比^シ及^シ貞享之末^ニ迄^シ十
餘年^ノ之草稿也其詩也^ハ為^シ學^ニ子^ト木子太白^ノ之

以情字杜子美之風次止乎字之而思
之則心知而不口慙初者從音訓之違
決而知難字物了矣於茲從元祿之始
思立大和之詩而製假名與真名之二
樣了則假名之詩者從五七之句法殆
為似和歌了共語路之拍子者謂漢土
之詩矣于然謂真名之詩者協音韻些
調平仄些蜂腰鶴膝之掙這一麼不背
漢家之詩法交以音訓之通路視之時
者漢字也共聽之時者和文也乎左在

共有故翁之所謂事大和者從中音之
以俗有狂歌有狂詩而叙如夫者千金
是者疝氣秀句與口相之雜話為各附
詩共歌共乎左有者一座之酒與而謂
猿樂人之輕口矣文章者例有娑情之
二而娑情有先後事者從本詩歌之骨
法也則言語之面通味者可口傳了共
娑情之枯回者不心知與所我今傳居
其間之糸節而同以凡雅不認於諸越
別以比與不狂于大和實麼思被喚我

朝之詩而將有雅俗通用之一格事歷
乍充有和漢語之音韻而為用俾語之
續了則似通昔之狂詩而不道散法之
罪止所詮者為蹈詩之六義此尋韻瑞
活法之古語而用二字之字之韻礎居
據說文韻會之正義而調五言七言之
和訓要者何迎可成教習者之狂詩成
表見師之狂歌矣耶多見羅山之七字
城了則其言取漢語以詠我朝之事而
此可為骨彼可為飾與者一言萬當之

凡例而謂為盡大和真名之要矣夫學
彼人者可恐此不恐此人者不學彼了
增而謂大音之凡俗則此物以人尔麼
為先教誡之情而為後文章之姿了則
花鳥之優游尔者為厥樣也共盡實情
之餘迎加陪助語副止手古之情者隨
天理居今之情者噯人理歷爾有則温
情之故而知姿之新了哉漸從李唐之
詩人增而至趙宋之作者則詩尔者除
助韻之字而五七之間不費言采見習

其身其終之各人而巧一字一言之妙
欲言無量之情共似童部之屈言傳而
有甫人麼推量之沙汰也李實夫我朝
者手尔波因也則傲詩經之麟之皇矣
而可用乎哉乎也之詞阜矣歌行之類
者勿論之事也其內音韻與平仄之事
者不知所用之道理共暫不背古法耳
也則假令遇兩韻之字時者可勿論用
兩韻矣乎從本見為得詩聖之名杜律
之互言七言了則平仄之不合麼有多

尔者向不知者而論不知事則夜麼月
麼摸象之費也乎孰思以雅之變則詩
者或騷騷者成辭而今者成詩歌與連
佛了則和漢有面々之物數奇而諫人
宛爾我宛從詞遣之虛實例知淋敷去
與面通去則詩者唯遊志之行處而不
如知言語之無用乎左者云些此詩之
易學而黃白之紡麼稍有多則世更成
狂詩之思而不田干烟學文之人者成
巴人薤露之和共向風而數之則不堪

于白雪之詠^六其誠恐而可學^テ誠學而可^キ
思者唯是^レ此詩之風姿也則凡情者今
之不及^ク言^フ于時元祿乙亥冬神無月
十二月試製^{シテ}真名之詩^ヲ而贊^{スル}故公羽之昼
像^ニ者^ハ爾也

其贊

東菴坊

此翁昔在武陵城
蘭省得時櫻繫馬
歌蓋西上人臨渡

野分芭蕉以雨鳴
序山捨世竹棲鶯
詩傲杜工部寫情

和漢文章誰可敵

假名不必隔真名

○評云此詩ハ婉麗ノ法ヲ以テ和漢兩用ノ作ト云フ按スルニ
一ニ起句ハ祖翁嘗テ武江ニ遁テハ芭蕉野分レテ
盟ニ雨ヲ聞後哉ト其世ニ郷音ヌル發句ニテ芭蕉菴
ノ名モ此時ヨリトヤ然レハ前對ハ一世ノ榮辱ナカラ向氏
文集ノ詩勢ヲ假リ後對ハ一生ノ夙雅ニレテ常ニ西行
ノ山家集ト杜律ノ五言トヲ持アキ結ル信古ノ實情
ヲ顯セルナリ此故ニ七八ノ結語ハ假名ト真名トノ通用ヲ
稱テ遠ク祖翁ノ遺命ヲ傳ヘ近ク我師本懷ヲ述レト
○贊云雪中柳
此繪使人思古詩
梅花未識竹先知

知_ト不_ト識_ラ孰_カ爲_ル愈_リ 柳_ハ氷_ニ凝_レ被_レ雪_ニ推_カ

○評云此詩ハ要語ノ格ニテ法ニ換骨ノ絶妙ト稱セン去ルハ
崑山ノ夜雪ノ句ヲ假リテ覺_ル字ヲ識_ル字ニ換タル例ノ
臆_ク句ヲ思_フ時ニ語路ノ拍子ヲ調_シ爲_スナリ増_テ孰_カ愈_リ
トハ論語ニ知_ル字ノ裁入ナリ然_レハ梅_ノ行_ノ知_ラ不_レ知_{ヨリ}
柳_ハ知_ナカラ雪_ニ推_レ居_ル人_ハ利_鈍ノ用_ヲ知_レトニ詩_ハ
誠_ニ此_等ノ訓_諫ヨリ孔子_モ常_ニ勸_玉リ_ル故_ニ續_ハ濃_ノ
野_航亭_ニ在_リテ祖_翁ノ竹_簾ト同_ク十_龍襲_ス柳_雪堂_ノ
標_号ヲモ此_時ノ稱_ナリトフ

詠_ス懸_ル松_ニ舞_ラ

何_レ不_レ朝_顔知_ラ我_ノ秋_ヲ 松_ニ憑_ル千_ノ歲_ヲ幾_ノ程_ヲ秋_ヲ

凋_ム時_ハ可_レ恥_ツ祇_ニ王_ノ意_ニ 莫_ク恨_ム不_レ知_ル白_ノ雨_ノ路_ノ秋_ヲ

○評云此詩ハ之韻一協ニテ詩意ハ註スニ及_ス祇_王神_女
カ四_ノ路_ハ送_峨ノ祇_王寺_ニ在_リ發_心ノ歌_ニ萌_出生_カ
枯_ルモ同_ク野_邊ノ草_何カ秋_ニ交_連テ果_キト誦_ス
テ佛_佛前_ヲモ恨_{スト}フ然_レハ此_詩ノ之韻ハ其_歌ノ意_ハ
摘_テ秋_ノ一_字ヲ運_ルナリ首_句ト落_句トニ不_レ知_ルニ字_ハ
連_佛ニ云_ル同_字異_訓ニ此_等ヲ和_詩ノ凡_例ト知_ルニ
不_レ知_ルモ莫_ク恨_ムモ万_葉ノ熟_語ナリ

戲_ル俄_ニ道_心

四_十八_枚願_ハ 終_ニ成_ル紙_子坊_ト

與凡僧若繁

每物遺淺黃

肩些有伊達

心曾無化粧

允尊初雪且

立不取梅香

○評云此詩ハ全ク大和ニシテ四十八願ノ仏語ヲ假テ紙ノ縁語ニ結スルハ戲ノ一字ノ詼諧ト知レシ按スルニ此法師ハ歌舞ノ遊興ニ千金ヲ尽シテ若道心ト成ヒルヤ若繁ノ二字ハ其所縁ト同ク此故ニ七八ノ結句ハ初雪ノ凡次ナリ梅香ノ凡情ヲ含スル一篇ノ凡雅ハ此二句ニ在リテ立而不恥者其由也與ト云ル論語ノ詞ヲ裁入スル詠者ノ虛實ハ更ニシテ又ニ摘採ノ絶妙ト稱スレ増テ梅香ハ絆子ノ鼻ニ敵シテ一篇ノ起結ト知キナリ誠ニ真名ノ詩鑑ト云レ

頃日從^リ二竹丈人^一祝^ヒ七夕^ノ之^レ即供^フ

而被^ル贈^ラ兼紙一束^ヲ及^テ謝^ヒ每歲^ノ之

恩^ヲ而^シ聊^カ寄^ス回情^ヲ而已

一柬^ノ荷^レ恩^ヲ何^レ若^シ輕^シ思^フ君^ヲ四^百八^十情

誰^カ知^ラ小^ノ兼^ノ戰^シ於^テ菝^ニ音^信不^レ講^ス文^ノ月^ノ名^ヲ

○評云此詩ハ大和ノ凡躰ナカラ論セハ連歌ノ復舊情ト云ハシ十帖ノ絆ヲ枚々ニ分ケテ四百八十ノ恩情ヲ荷フトハ誠ニ微意ヲ尽セリト云レ然レニ十字ヲ時深坊ニシテハ春風ニ而九十橋トモ南朝四百八十寺トモ其類ヲ長安ノ語音トカ註スト我朝ノ人ハ語音ニ通セス何ノ道理トハ知子氏古法ニ任スル例ノ故實ナリ去レハ之四ノ結文ハ全ク和歌ノ詞ヲ摘テ

三四六ノ文法ヲ立ルハ例ニ似ルノ意地ヲ知レ然レハ詩ト云イ
文ト云イ五七ト四六トノ拍子ヲ知ルハ和歌ノ優情モ能ク平語
モ雅俗ハ言々ニ知ルキナリ

珠貝ニ秋風像ニ

蓮ニ二房

世傳、此老公羽
今見何難面

越路恨秋風
松残夕月紅

○評云此繪ハ松ノ木陰ニ老僧ノ杖ヲ推テテ雲ニ夕日ノ残照
ヲ詠スハ躰ナリ去ルハ芭蕉先公羽ノ越路ノ行脚ニ赤々ト
月ハ難面モ秋風ト詠セシ旅行ノ愁情ヲ引替テ今見
レハ景色ノ面白ト轉シテ答ルモ作者ノ活法ナリ此等ニ
意地ヲ知テ其繪ハ越中ノ倚斎亭ニ在テ知ニ舟家珍ト
セリ

戲影法師

水陳人

木端影法師
終而將既整圍

盃取夜寒
無當非玉卮

○評云此詩ハ例ノ詠詠ナカラ徒然州ノ意ヲ摘テ今法師ノ
無風雅ヲ詠諫セシ身ヲ木端ニ搭呆テ月花ニ寄テ宵霖
セハ玉卮モ當ナキ心地ヲト全篇ハ二月ヲ含メ九隱見ノ法
ヲ見キナリ結句ハ木端ノ繫ニテ玉卮無當雖空非用
ト云フ文選ノ詞ヲ採ル非字ノ影畧ヲ互見スレ去レト
當字ニ平仄ノ論ハ例ノ兩韻ニ任スキナリ作者ハ尾陽ノ
素水ニシテ水陳人ハ標号ナリトフ

謝初茄子

作者ハ慧心庵記
ニ各録アリ

土方堅

含露^テ點^ル毫^ハ鮮^カ
我^ノ鄉^ノ何^レ為^レ陋^シ

更^ニ思^フ竹^ノ葉^ノ所^レ綠^ク
日^ハ瘦^ク不^レ掉^ル始^メ

琴^ノ身^ニ鳥^ノ羽^ヲ繪^リ之^ヲ蒲^ノ首^ヲ吸^ク 渡^ル白^ク狂

翠^ノ吸^ク蒲^ノ首^ヲ何^レ國^ノ僧^ノ 足^ハ如^ク電^ノ馬^ノ只^レ如^ク蛙

盜^ム時^ニ有^ル好^シ威^ト童^ノ部^ヲ 夕^ニ遇^ハ裁^ノ園^ニ可^ク振^テ疾

位^ハ園^ハ洛^ノ全^ク暇^ナ筆^ヲナ^リト詩^ハ詠^ハ諧^シシテ註^ニ及^ビ其^ノ繪^ハ
濃^ク六^ノ之^ノ亭^ニ在^リ但^シ裁^ノ園^ニ百^ノ葉^ヲ移^テ高^ノ卧^ノ郎^ハ自^ラ稱^ス

△假名用真名韻序 並詩 康安道

我^ノ園^ノ諸^ノ越^ノ之^ノ人^ノ者^ハ作^レ詩^ヲ了^レ共^ニ不^レ能^ク他^ノ國^ノ
之^ノ歌^ヲ大^ニ和^シ之^ノ人^ノ者^ハ誦^ク歌^ヲ了^レ共^ニ不^レ能^ク彼^ノ邦^ノ
之^ノ詩^ヲ假^シ令^ヒ詞^ヲ者^ハ有^ル音^ノ訓^ノ之^ノ違^ヒ麼^ノ情^ノ者^ハ何^レ
連^テ隔^テ和^シ漫^ク矣^ハ自^ラ則^シ高^ク麗^ク人^ノ麼^ノ馴^ク大^ニ和^シ歌^ヲ
而^{シテ}誦^ク我^ノ唐^ノ國^ノ之^ノ妻^ノ所^レ意^キ敷^ク琉^ノ球^ノ人^ノ麼^ノ遊^ク
筑^ノ紫^ノ而^{シテ}詠^ク紅^ノ葉^ノ赤^ク洵^ク園^ノ之^ノ夕^ニ自^ラ鼻^ヲ矣^ハ皆^シ
只^レ為^レ風^ノ雅^ノ之^ノ通^ク情^ノ厚^ク哉^ハ初^メ社^ノ所^レ自^ラ彼^ノ邦^ノ
之^ノ詩^ヲ經^テ者^ハ通^ク我^ノ朝^ノ之^ノ万^ノ葉^ノ集^テ居^テ唐^ノ詩^ノ之^ノ

凡有為似古今集與我詩者本通和漢之志了則也今者六歲之先也季農東有桃花老仙而奈何捨我國之易讀假名而學他邦之難知真名耶迎新製平假名之詩而令盡漢家之詩法者誠謂本朝之文鑑者矣於茲不恥我拙頃日送運老師之歸羨濃迎為假名之詩用真名之韻止乎老師稱其詩曰先師昔有奈猶文而斯所交和漢之韻今也以七詩之格可謂万葉之韻與所誠哉

如放之文之箭而獲八而之區率夫不謂微俸季耶仍以爾云

招よおのくれ年とあふ霜
 おあお秋の白さうか
 此れあふもおれふありな
 此れ時多のさうか
 享保甲辰の歳且丁削の詩とあつち
 是る全て万葉の韻とあり一冊の撰お
 こそとそ行りしち
 園君と祝下
 庶宇道
 去る心と神はしむ
 是る心と神はしむ
 我も心と神はしむ

おろく万葉解とて

毛物子

天はく我より露やふか
草のや此花ははく
我のりこれ非をきふ
現の海ははく

○評云右此之首万葉韻ノ濫觴ニシテ或ハ音ヲ用イ

或ハ訓ヲ用ユ去ルハ其書ニ跋渉シテ多ハ古例據ルヤ

学フ人ハ例ノ狂簡ヲ恐テ作者ハ賀ノ金城ニ住シテ

庶熊ヲ姓トシ守道ヲ名トス本ヨリ詩騷ノ逸人ナリ

トウ毛物子ハ橋姓ニシテ俳名ヲ侶鶴ト云フ金城ニ数奇

ノ名ヲ稱シテ編行官家ノ人々モ友トシ学ヒト云フ皆

嘗テ先師ト虚実ヲ論シテ書通ノ遊敵ナリトク

享保甲辰の夏あしかの万葉の詩といふぞ猶

ましく二字韻の熟語あつて柳子庵上例の遊民

とちやて又月雨のおお淋さなましく忠題と

はくりうげちや二字韻の熟と製と

田家志

蓮二房

はくちもの名はくちの
花はかみんあよりや
俗中

浅香あはね沼めが
後のらばたさ
敷通

○評云此体モ万葉ノ韻ニ似タレト多ハ訓ニシテ音ハ稀

ナラン然ルハ此格ノ要ス所ハ和漢ニ字ノ熟語ヲ尋テ

私ノ韻礎ヲ作テラス狂ト不狂トハ此壞ナリ梅を露濃

上雅俗通用ノ平話ニテ

ハツカシ

ノ二字ハ日本紀ニ出テ

ハツカシ

影副ハ万葉ニ在リ

ハツカシ

斬通ハ真名

ハツカシ

文深卷二

ハツカシ

伊勢物語ニカハシラカシトハ削る各語ナリ然レハ浅香花
 カウニト詠シ影副所見山井乃ト誦メル總テハ古歌ノ
 裁入ニテ此等ヲ二字韻ノ鏡ニ見ルレシ去ト爾思凡
 糸瓜氏俗習ニ用ク来レ故宮ノ詞ハ論ニ及ハズ但ハ
 自己ノ作ト云フ凡或ハ古文ノ例ニ效ク或ハ文字ノ多ニ據リ
 或ハ字訓ノ郷音ヲ假ラハ却テ奇絶ノ作モ有キナリ
 其等ノ設ハ大和詞ニ見ルヘシ

こゝろみ月のけりも若山の蓮作より真名名此
 ニ字初とあはれとて思の一事とわたりぬり
 あり物 ちとあはれとて思ひ多し思ひと

怨七夕ノ意

鹿守道

こゝろはつゝのあはれ 浅儀 何のなきむしをたれ 虚言
 人の存ふのあはれ 葉葉 いづれをちまひたれ 浅儀

○評云此詩ハ恨意ナカラ逢不逢意トヤ云ハ誠忍情
 ノ的白ナル此等ヲ俳諧ノ微中ト賛シテ和歌モ凡
 斯ト稀スレ按スレ浅儀ト例ノ假訓ニ意ヲ運ヒテ
 此類ヲ大和ノ古文ト云イ虚言ハ常語ヲ論及ス然レ
 ニ葉葉ト添ハ樽トハ全ク作者ノ働ニシテ葉葉ト根葉
 ハ削ノ俗習ナリ況ヤ淺儀ノ古語ヲ假ラ物ヲ添ハ
 ニ據ル字訓ノ郷音モ文字ノ美モ此等ヲ自作ノ絶妙ト稀スレ
 右今より又首と文標ノ新制表の二口也前の首
 と下葉韻といひ後の二首と二字韻といひ畢竟ハ
 束韻の要なりて作し不作しを問ふるべき也

老圃詞

我とかいーと人のるり可圃
勝るる此をいふまき来品

露の志これいふのあけ相曉
おとせぬ世のふゆり而云

岸昨裏

祝州餅

桐左角

あまのそとをいふるよみ廉
名もあまのそとをいふ劍
けふせよりのそと兼
あまのそとをいふるよみ廉
あまのそとをいふるよみ廉

○評云此詩モ万葉集ナカラ稱ス所ハ之四ノ面通味ヲシ嗤ニ
厚餅ノ撮タルヲ尊ノ振ニ喩ヘ芋頭ノ躡タルヲ鶉形喩フ

去ハ俳諧ノ形容ナリ況ヤ花ヨリ團子トハ民間ノ俚語ナル
ナリ然レオニ韻ノ鹽ノ字ニ假名遣ノ論アルニ庵ト云
類ト云テ捨ル字ハ總テホノ字ヲ用タト故更ニソ道理ナキ
故ニ我朝ノ字書ヲ見シホレシヲ假名附アリ物ニ假名
遣ト云フ更ハ定家卿ニ後ノ沙汰ナリトヤ道理ノ知レヌ
更多シ然レ兩韻ノ序説ノ如ク其字ニ其理ノ明ナリ又
ハ時宜ニ隨テ用キニヤ例勅家系スレ作者ハ三方樓記ニ
各アリ

喜七又晴

池二川

今宵ハ昔此風もあつた
世に此ちまのそとをいふるよみ
年のあまのそとをいふるよみ

まつゆくとやみき ちよ詞のほほある
 我れぬらみの衣かきまき ねえとねいぬけぬれ
 ○評云此詩毛律法ノ新制表ニテ例ノ大和ノ格トヤ云シ
 一三八言ト據トヲ以テ漢ニ前對ノ法ナカラ中間ノ三對ニハ
 文字ヲ對セス漢ノ四字ヲ以テ此等ヲ意對
 ノ絶妙ト稱スヘシ但ヤ假名ニ真名各ラ附ルハ催馬樂
 ノ古制ナリ作者ハ越中ノ富山ニ住ス池田氏ノ家ニシ
 先師ト北蘭ノ友ナリトフ

雜題

假名詩類

果好法師贊

表花仙

現はひり静ちるさなと かねりまはゆるも
 あ部の花をよ送ありり 古曾記の月日袂花あなむ
 富の一字に伸直さるひ 予の子のよ威忠いささ
 本を才きよを切まき 是れく神の種をさめり
 柳の雨にちよとれとと ちよんちよちよちよちよ
 ちよのちよちよちよちよ けちよのちよちよちよちよ

柳後園屋露

馬や人
詩歌時在名

馬や人

愛牡丹

作者ハ枚子頌ニ
名録アリ

仔東怒

牡丹の露は此の如くあり 猶も木の下に露を結ぶは
我を憂ふ心のひかりをば 人の心は花の葉にまはるる

詠^ス梅^ヲ

高九把

梅よ えひりけ みのあはれえこ
雪に 後ぞとて 喜なきあう
園と あやあり きれうらうらむ
雲に 香とある あらばふあはれ
伏詩ハ唐ノ李太白カシ五七言ニ效テカウ和ト候トニ
音訓ノ差別ヨリ句ノ配リノ違同ヲ見ヘ作者ハ
高田氏ニシテ尾城下ノ逸人ナリ



擬^フ古^ニ

作者ハ文基序ニ
姓氏アリ

張昇角

松と竹との大路はさげし 如きにあはれを即月とや
孔と非代ののさしあはれ 舞のまをちりかきあはれ

筆

伏詩ハ万葉假名ヲ假ツテ
都金ト時雨トニ字ニ對ス
大和ニ對類ノ格ト云ヒ

岸昨裏

るよとらふあのみとあはれ 文子と伴ある世いとあ
口よりれはあはれかぶり 足あはれとあはれとあ
あはれとあはれとあはれ 竹のうらみのあはれ
そもやあはれとの世とあはれ いくと遊女の世とあはれ

嶺南傾城

作者文鑑三姓在アリテ

黃山下ノ隱士ナリ

渡右範

乃とくふるの君よまのひて　きりぬれおのきもけりまね
まよりぬいの時よあはれ　後のおいよおあつあつた

對花感老

作者有越安居士ヲ
辭シテ其麓ニ居テ
ス南居ヲ抑明者ナリ

僧音吹

さきもふるやむし時あり　山も移るもくらしはつた
まよひてくらしやあはれ　ふりやあつあつたよは

民詞

作者有文鑑三各録アリ
獅子ノ親族ナリ

各東羽

此とふるあしむのさけとや　まげとふるあつたわくと
あつたれおの柄とふるくと　我もこもれあつたわくと

算

擬古詩

渡白狂

宿のりき名此梅と館とや　竹とつねのまのひ事ありや
梅とつねとや　さきとつねとや　わらわらとつねとや

○評云此詩一字に韻ノ格ナカラ梅ト竹ト四句ニ配リ又ハ
古詩躰ト云キナリ本ヨリ一字に韻ハ漢ノ体ニ多ク下
和訓ニハ語路ノ方ケ難キヲ疑辭ト云ク嘆辭ト云ク口合
ノ別ヲ以テ之段ノヤノ字ヲ用ヒタル例ニ天和ノ新制ト
云ハシカシハ一篇ノ註スル所ハ算宿梅ノ古語ヲ假テ算

ノ一字ヲ含スル格ニ隱見ノ絶妙ト稱ス(キナリ)

師走朝寢

仙里紅

力と松栞の歸しはるが 正ちち頭此極へつてよ
園より木の坂と越ねて 世と去る川に漕ぎつて

○後云詩ハ黃鸝園ノ歳暮春ニ賦シノ與、躰十カラ梅ニ
ハ暗部ノ古歌ヲ摘ミ白川夜船ノ俚語ヲ採テ誠ニ俳諧ノ
滑利ト稱セシ作者ハ柳川ノ十哲ニシテ摺ハ木ノ歳ニ各録

松茸狩

松丁牧

秋の對面北へあるは 暖流の山く物さる

はむじし神のまをぬき いくは傘此柄とて
そし仲國の噂やちり けり成西久もさるるむ
遊路の町も河をひき 包やさるり紅雲とて

○評云此詩ハ全ク賦躰トシテ後對ハ例ノ寓言ニ似タト
暖流ニ仲國カト聲ヲ喚出セル様ヲ示シ茸狩ニハ
盛久カ松風ヲ扇シ乱舞ヲ令ム然レハ西行ノ歌ヲ
起句ト成レ樂天ノ詩ヲ結句ト成セル和漢ノ操ハ更ニ
シテ總テハ採文ノ絶妙ト稱スレ作者ハ尾城武内ニシテ
近松ヲトシ茂雄ヲ名トス其祖ハ美濃ノ山縣ニ産シ
北野天神ノ御子ナリト云々宣法家ヲ練兵堂ハ稱号ナリ

戯花

作者ハ能登ノ七尾ニ住ス 岩城守ノ優人ニ同躰ト 岩長羽

むも好むれはらむも好むれり
むも好むれはらむも好むれり
むも好むれはらむも好むれり

笠

作者八冊羽年ノ凡人ニシテ
尾城下ニ放遊セリ

冊以之

蓮の葉の立と音によると
あゝととあゝととあゝとと
あゝととあゝととあゝとと

鏡山詠四季

林有琴

水と流るるぬるの流り
水と流るるぬるの流り
水と流るるぬるの流り

席のひききおおひきき
席のひききおおひきき
席のひききおおひきき

○評云此詩ハ全ク卿体ニシテ四季ニ詠ノ分明ナル誠ニ風景四絶

ト云ハ但シ鏡ヲ鏡山トハ客語ニ似テ郷談ナリ其山ハ美濃ニ
名高キ稱葉山北面ニ遠目テ例ノ長良川ハ東西ニ横フ櫻ニ
螢ノ花和ル席ト称ナリ物淋キ国ニ無双ノ名蹟ト云ヘシ
然レ此詩ノ評ニ処ハ二鏡ノ風流ヨリ四季ヲモ長良ト詞ヲ穀キキ
国ニ美濃ノ名ヲ並ヘテ結句ニ諧語ヲ用ヌルニ等ナリ成俳詩
ト稱スニ作者ハ今ノ長良ニ住ス泊楓老人ノ長男カニシ林仲徳人

詠蓮

作者八越中ノ城ケ端ニ産
シテ市中ノ隠者ト稱セリ

其風子

むも好むれはらむも好むれり
むも好むれはらむも好むれり
むも好むれはらむも好むれり

極糸の御北極にあつては 我の此世をわたりあはれん

梅嫌

作者ハ園論ニ各録アリ
嫌ハ厭ヲ和訓俗習トク

岸倚彦

新ははらくむとあはれむ 雪と花のなとあはれむ
梅の白とあはれむとあはれむ 我の此世をわたりあはれむ

悼水園公

蓮二房

越のそとに此のほろろぬ 世とあはれむ水園公のそとに
月の入部の水とあはれむ 風やおほむ此世をわたりあはれむ
武と景とあはれむ梅とあはれむ 文と頼政のそとにあはれむ

わらわらとあはれむ 我の此世をわたりあはれむ

○評云此詩ハ風流アリ和漢ニ通用ノ鑑トヤミシ
去ハ前對ノ水ト行ハ其地ハ竹林ニ河中ヲ廻シテ屋敷ヲハ
水園館ト云イ茶廬ヲハ此君菴ト云フ其館ノ各勝ナリ
トフ後對ハ文武ノ稱ニシテ其名ノ風流ヲ添ナラセテ花ヲ咲
トハ本歌ニ敵シテ誠ニ翻轉ノ絶妙ト稱スレ況ヤ七八結語
ニ冥途ノ身ノ名ニ寄セテ同シ道ニト志ニ慕ハレ近ク朋友
ノ信ヲ尽シテ遠ク生死ノ道ヲ志スレト云レシ世ハ金城ノ
駒ノ子ナリ終焉ノ記ノ筆第ノ註ニ互見スレ

晚整

作者ハ島田中ニシテ信ノ善光
寺ニ住メリ獅子ノ書通ノ俳士

云未格

山をばにたぐくまればなり 孤村の月の水よりしる

酒よたんとこにりまあふぬ　　も葉の南は成りぬち

松讚

他松ハ智ノ金城ニ在リテ作者ハ
豆田ギナリトシ錫文評ニ見
ス現

豆田曲

代く此奇世くめり　　こまこちりねれり

吾とあつ旅此新　　雨よやると物此葉

以もきつ了樟あつて　　手たれむ賢あつと

むうららげあつて　　りあつてもあつて

菊花

水陳人

角とあつてあつて　　角とあつてあつて

肩とあつてあつて　　肩とあつてあつて

業平、益賢

弓笠前ノ百スル
車帝ノ像ナリ

菊花仙

むうねとあつてあつて　　けつとあつてあつて

あつてあつてあつて　　あつてあつてあつて

あつてあつてあつて　　あつてあつてあつて

あつてあつてあつて　　あつてあつてあつて

津石意

作者ハ羽ノ鶴園ニ住ス深沢氏ノ
優人ニノ吾仲左角ト書通ノ
友ナリ

沢山七

あつてあつてあつて　　あつてあつてあつて

二行ともしらるるはさきと 石のまゝ指とわれとや

寄餅意

松丁牧

向と梓と此をなればさきと ときをいひて此を後時と
まきと孫の前此を後と ときをいひて此を後時と

挑灯吟

作者ノ兩名檢餅詠ニ
世講ニ京師ノ作アリトナ

陳素六

世とぬらなくと猿とさあられ 力とほらと孫の字各まある
月あうりまゝと度法と挑也 世のやうとまゝと海らうと
五月の穴のくおれと挑あり 挑の園此にだけとたたく

餅の小川の流もなるとや かつら踏あげ此流とあるを

四季詠

作者長野中三越ノ新撰
任ス長路雪洲カ家弟ナリ

長北柱

我がお起とせととつとや 時をいひて此を後時と
言の火燈此を後と 月と雪と挑此を後と

去者日疎

馬文人

うのち此を後ととるれ ひとりのまゝとひとりの
麻柯の板ととるれ 蓮葉此を後ととるれ
刺鯖の孫ととるれ 持手此を後ととるれ

今とある鴨川北 東とある河とありぬ

年加賀

此名六深の柳字ヲ讀法ノ
一夜菴ニ住ス宗鑑の跡ナリ 而老坊

じやうし新名此書に述は 我らむ朝の林も嘆きし
早のゆりせ松よちたけりて ちと山つる新舟ちり

新舟遊覧

作者童平ニ此名ハ文鑑
ニ下リ八弟ハ發生家ノ
能辨ナル故ニトク 梅長七有

水月のはししち伊勢の八弟とりのあきむし夏の
新舟の接おとさくくん風煙くそおとこも
橋も毛鐘と高もそんく大吹川のり幸に流の

わねやれわねの風はるるんぐと能儀のわねやん
新舟のまぬくそんくくん風のそんくもぬん
とけりるそんくくんくんくんくんくんくんくん
とあはれんく新舟もくくくくくくくくくくくく
の文はるるんくあやんくくくくくくくくくくくく
流し新舟のまぬくそんくくくくくくくくくくくく
きんくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
新儀くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
かの侍服も衣もそんく 節の二おとあはれぬり

遊女伝

伊東怒

ひらり森の肌をむく
 おくまきしきぬ
 錦もをきくまねく
 板子もを成るしんも
 二の殿おるまきむし
 新炊の秋もねぬ
 毛もまきしきぬ
 いりまきしきぬ

恨別世詩尾城作今各ラ出 佐麦士
セリト権辭記ニ其評アリ

神道の庵を此何かねから
 風の名もし神かみり
 ねとまねぬ色もまき
 梅もはるまきぬ
 呵ハ猫ネ 首尾吟
 岸倚度

金婦く加カとまき
 小ぬらコとト足スまむ
 あるまアルまマまマまマまマ
 ねぬネぬヌぬヌぬヌぬヌ
 荒アラまマまマまマまマ
 ねぬネぬヌぬヌぬヌぬヌ
 金婦くカ加カとトまき
 祈むイりリくク鳥トとトあアあア
 金婦くカ加カとトまき

雨アメ日ヒ高タカ安ヤス鯛タイ牛ウシ

豆マメ凡ナニ曲キョク

かくはぬカクハぬヌくク
 雨アメのノれレたタりリしシるル
 園ウヅとトりリ角カクたタくク
 家イとトかカるル教カウのノちチ
 荒アラまマあアるル下ゲ竹タケのノ園ウヅ
 祈イりリくク鳥トとトあアあア
 小水コミヅ神カミとトあアるル子コ

野馬賛

花仙

春の御馬にねあはし
まはさくちやまはん
まはさくちやまはん
まはさくちやまはん
まはさくちやまはん
まはさくちやまはん
まはさくちやまはん
まはさくちやまはん

寄團扇意

高九把

團扇を人の種よあれは
風のきこりたる春ある
よのほのめはく言ありと
まはさくちやまはん

越の巴^ごご^ごらん^{らん} 舞の境^まの^まと^とあ^あら^らひ
か^かの^の中^{ちゆう}に^に尋^{たづ}ね^ねた^たる^るか^から^らい^いま^まの^の
時^{とき}は^はも^もた^たか^から^らい^いま^まの^の
ま^まあ^あつ^つま^まの^のま^まの^のま^ま

蓮二房

舞をさけあ人のまはさ
ほきつねまはさくち
まはさくちやまはん
まはさくちやまはん
まはさくちやまはん
まはさくちやまはん
まはさくちやまはん
まはさくちやまはん

蓮二房の舞

得巴了

松よひささみの舞
まはさくちやまはん
まはさくちやまはん
まはさくちやまはん
まはさくちやまはん
まはさくちやまはん
まはさくちやまはん
まはさくちやまはん

○歌類 雜題

素老人贊

正親町 公通

はくくくはれいゝかきあはぬ哉
今あうまゝあひいゝあう

いゝ字紙の掃くつゝいゝ字

いゝまゝのいゝいゝ使ゝいゝ指 宗鑑法師
いゝいゝあつゝいゝいゝ

いゝいゝあゝいゝ連ゝいゝいゝいゝいゝいゝ
いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ

題不知

此坊蓮蕉之羽ノ称名ヲ
得ニ之趣ニ名高キ道心

秋々坊

焼くはゝ灰のいゝいゝいゝいゝ
あやあけらりらららららららら

白髮吟 孟序

芭蕉公羽

はくくくはれいゝかきあはぬ哉
今あうまゝあひいゝあう
いゝ字紙の掃くつゝいゝ字
いゝまゝのいゝいゝ使ゝいゝ指
いゝいゝあつゝいゝいゝ
いゝいゝあゝいゝ連ゝいゝいゝ
いゝいゝいゝいゝいゝいゝ
焼くはゝ灰のいゝいゝいゝ
あやあけらりらららららら

わら言ふもあはれに文のくせも世とわかれし母の心
わらぬも浦のうらみはわらぬおとけのうらみはわらぬ
わらぬも年月のたふらぬとわらぬはわらぬ

一家よりふたつをわらぬはわらぬ

わらぬはわらぬはわらぬ

○評云此吟の遺稿の良語ニ題類ノ評論アリ其論略文
ニ故翁嘗テ官ヲ解シ玉に故郷ヲ隔ルニ七年年ニ或年
此懐旧アリ去六天和ノ始トフ其後伊賀ノ西林集巻ニテ
例ノ文稿ヲ改ルトテ今思フニ向鬢ノ魂筆ハ其日ノ感情ハ
演メト發句ハ繁ル波ニ作ラス此故ニ冬ノ字ヲ以テ歩行
様ヲ形容セシニ當禾子ノ詞モ憶テラス増テ地子ノ入野ナシ

此等ヤ有攝躰ト云テかゝるものありて下句ラ云
次キテ他語ノ歌モ然キヤト云ルニ實モ前書ノ咏嘆ヨリ
至差々ノ哀傷ヲ評セハ玉屑ニ云ル玉將曲ノ悲心ノ有テ吟ノ字
ヲ題セシト漢家ニ杜陵カノ字ヲ假リテ自鬢吟トハ題
セシテ誠ニ題類ノ太切ナレ此等ノ註義ニ知レトフ但シ此論ハ
古文後佳キニ昔漢堅臣カ舞学ノ沙汰ナリ然レハ今ノ歌類
ニ詞曲吟讚ノ類ハ漢家ニ文選ニ隨ヒ本朝ニ文粹ニ效
ヒテ詩歌ハ本ヨリ一根本故ニ此等ノ題ヲ交々ニ後人例ノ考

扇歌 五序

東花坊

ふたつは扇は後春の心にあれし本ふるはわらぬ
ふたつは扇は後春の心にあれし本ふるはわらぬ

されぬのちあはれしけ 節のちらむとてしりては
 のほれちしあはれしけ 我らのまをちりて
 ちしやあはれしけ ちりてあはれしけ
 ちしやあはれしけ ちりてあはれしけ
 ちしやあはれしけ ちりてあはれしけ
 ちしやあはれしけ ちりてあはれしけ
 ちしやあはれしけ ちりてあはれしけ
 ちしやあはれしけ ちりてあはれしけ
 ちしやあはれしけ ちりてあはれしけ
 ちしやあはれしけ ちりてあはれしけ

ちしやあはれしけ ちりてあはれしけ
 ちしやあはれしけ ちりてあはれしけ
 ちしやあはれしけ ちりてあはれしけ
 ちしやあはれしけ ちりてあはれしけ
 ちしやあはれしけ ちりてあはれしけ
 ちしやあはれしけ ちりてあはれしけ
 ちしやあはれしけ ちりてあはれしけ
 ちしやあはれしけ ちりてあはれしけ
 ちしやあはれしけ ちりてあはれしけ
 ちしやあはれしけ ちりてあはれしけ

○評云此歌ハ全ハ備六章ニシテ毎章ニ之句充テラテ率ヤ
 廿三羽ニト拍子ヲ換テ結文ハ和歌ノ語路ト成セ凡俗ニハ兼歌ノ
 格トヤ云シ然レニ此歌ノ韻法ハ和歌ニ求韻ノ古制長トヤラ例ニ
 我家ノ新格ヲ加テテ羽五章ハ起語モ結語モ五韻一協ノ
 躰ナカラ後ノ三章ニ韻ヲ換テハ。又ノ各章ニ之韻ヲ數テテ
 結文ハ分クスツノ韻ト成セ凡俗ニ秋凡辭ノ知キ六韻一十ノ

騷論モ世等ノ文貫ト察スレ音韻ハ暫ク古法ヲ守ルノニ
 總テ推量ノ沙汰止ハ後人ハ剛ノ鄭家セヨ初ニ傳ノ註スル
 所ハ其ハ八扇ニ寄セテ逢字ノ縁語ヨリ班チカ恨スル古語ヲ
 假リ其ハ六故辨ノ扇ヲ見テ法顯ノ歎キレ故更ス合ス目ハ之
 ハ便面ノ詩歌ニ残リテ人ノ記念ノ果敢ナキヲ云ク其四ハ係
 舟ノ生別ヨリモ今ノ死別ノ悲シク云フ其五ハ市廣ノ詞ニ敵レ
 世ノ定ナキ有様ヲ云ク其六ハ貫之ノ歌ヲ摘テ世ノ永キ別
 ラ云ルニ招魂ノ二字ハ追慕ノ親切ニシテ一篇ノ骨節ト知
 ケナリ但シ世扇ハ越ノ俗免ニ傳テテ而案在ノ水珍ナリ所々
 ニ傳ズル違モ有レシ

辭世詞

宇治通圓

一服一錢一期中

取期一念云脚俗

~~~~~  
 一服一錢一期中  
 取期一念云脚俗  
 ~~~~~

佛^ニ奉^ル奉^ル歌

苗草陀

牡丹ともの玉とてしほ 縁のなきわの雲もろと
 けくととけととてしほ ちのなきわの雲もろと
 縁のなきわの雲もろと ちのなきわの雲もろと
 ちのなきわの雲もろと 縁のなきわの雲もろと

るひかしむ世やほかたけ ちりしむるのまよひはなれ

○評云此歌ハ樂府ノ古辭ヨリ十句ニシテ五韻ヲ用テ去ハ八韻對ノ法ナカラ論セハ大和ノ新制表ト云ハシ去レハ一ノ篇ノ終スル所ハ其師尚白老人ノ生前ニ勸テ愛セシヨリ今ハ西行ノ櫻守ニ勝リテ廟前ニ此花ヲ奉リケントウ作者ノ姓氏ハ勿由詳ニ出タリ

挽歌 並序

渡白狂

我々ありきる人の子此時より人の心をさすれい
るしうあひきりしきまじきけりまのちのあやめ
るの月影のよりに涙を流しをぬはれと我々の膝に
てあめはさす戸のうらみは積の子はあぢらりしむる

流りてあしきつねにけりしむるのあはれは
て高此の心あつねのあはれは此の心

せうれくおいしきまじきけりまのちのあやめ
きりしむるのあはれは此の心

○評云此歌モ樂府辭十カラ前ノ之句ハ七五ニ韻ヲ踏之後ノ
一句ハ七々ニ韻ヲ踏ムをモ和歌ノ韻法ニシテ總テハ八句四韻ナ
本ヨリ樂府ノ常法ニ發語ヲ句外ト成セリヨリ和歌ノ求韻
モ五文字ハ言捨ナリ然レハ此等ノ歌ヲ以テ和漢通用ヲ稱ス
比紅尼曲 此曲ハ例ノ新制表ニテ此等 山岸昨襄
ヲ大和ノ風謡ト云キナリ
むしハ麻此の心此花をいふとむらみは積倉りしむる

あなほのそはちりしむもや 鹿とくぬの鹿もよきか
暖かいのちりしむもよき 服部あなほのそはちりしむも
あなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむも
いとよきあなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむも
世と秋風の同じくあなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむも
あなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむも
あなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむも
あなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむも

七文雅和讃

百阿佛

あなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむも

あなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむも
あなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむも
あなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむも
あなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむも
あなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむも
あなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむも
あなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむも
あなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむも
あなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむも
あなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむもよき 夕のあなほのそはちりしむも

○評云礼讃ハ序山ノ遠法師ニ始リテ太夫奉ノ善觀ノ序ノ節
ヲ附王ニ我朝ノ声ノ明ト成セリ其意ハ仏ヲ讃歎ノ和歌
ニ咏嘆ノ類ナリトフ然レハ此讃ノ趣ハ人間ノ色采白ヲ

星三寄セテ人ニ無常ヲ示スハ應現婦人仏説ニリ菩薩
ニ天部ノ称号ト知レ誠ニ佛説ノ疑クニ云ル談矣訛諫ニ能ク又
ニテ遊宴中ノ哀手ヲ知レナリ而阿ノ右ハ刺豎ス文ニ出
ルリ

讀法華經

秋く坊

その時ふとてらばらけおちあ
こげとあふもいばけちひくれ

故人庵茶歌

蓮二房

唐のやまに花さす花中に一斗石と雨のうらみやある
そよばえせうか〜そよ〜角に風動竹疑是故人

来りてはらむりりき飲茶逢ふお〜きげん行よ
わ〜つれまむはれとけなぬあ〜と茶客のいせ
〜海ふるもか〜序らぬ雨は淋〜とま〜い〜たの
離め〜ち〜〜とま〜い〜い〜い〜い〜い〜い
〜人ほせのゆに空のふ〜し〜唐とる〜と花竹と
花の〜とま〜い〜経糸の〜動竹〜車とり〜と玉川
お茶の焙が茶と入れ〜ち〜い〜い〜い〜い〜い
〜れ〜い〜あら茶に石めきつねれ〜い〜い〜い〜い
〜遊め〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
茶枚〜と〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

容スレ玉川茶湯八種ト見タリニ碗以下七碗ニテ其歌ノ
 取急ナリ●同歌唯覚西脛習外清風生云○貫之歌
 採らるるあめりたををのりて定まらば友をそとせり
 出ノ通ラト式子内親王ノ歌ノ裁入ナリ○新古今のちてゆ
 かりし入ノ麻のあつ吹かゆる萩のち凡○孫子裁子代
 ぬ一きくあめのちりまきし掛つれ行もや云とふん
 ●茶歌、結文、蓬萊山在何處玉川子乗此清風一歌
 帰去云結語ハ以ノ一字ヨリ一篇ノ新續ヲ見止キナリ
 ○厚云此音と如より採まらば序全ク茶歌と題ミテおとれ
 起指新撰の句採子しおらば長短音の辨りておとれ
 七新製の一格とておとれし行も故人の流し李の
 ことし李之無とし作を、両方のけはあれ、例の後勤

一も也、序、全篇の稱よりおとれ茶とほらた一節の
 こと地とわらうし行も違てた子代の祝言とあとい
 下句採をあまきく和音の採中をさるゝと和音の
 鑑よりんく長短音此辨をさるゝと茶はれはありしと
 採家の採はれりて越の福亦と婿官も去駁ハ此流
 のあまらるちりりて云暇の暇音を青了園とあとい
 下六和云と方印のなありしと

練漣歌

野盤子

野棲山宿野盤子愁病何為採漣頻
 桃李難親唯一日雁無見過己之春

可憐重^{シテ}茶^ヲ長^ク為^シ客^ト自愧^シ傳^{ハテ}書^ヲ遠^ク附^ラ大^ニ
 我^ノ面^ヲ 夜^ニ深^ク 扱^フ木^ノ身^ヲ 墮^ル 日^ノ莫^ク 忘^ル 家^ヲ
 子^ノ罵^ル 嗟^フ 夫^レ 灯^ノ火^ノ 幾^ク年^カ 傍^ニ 母^ニ 香^ノ 烟^ヲ
 影^ノ 月^ノ 亡^ク 親^ヲ 君^ヲ 見^ユ 眼^ニ 染^ル 烟^ヲ 霞^ヲ 誰^カ 可^ク
 憐^シ 心^ヲ 誇^リ 風^ヲ 月^ヲ 未^ダ 全^ク 負^ヘ 起^キ 来^テ 好^シ 有^ラ 皮^ト 與^ル
 膏^ヲ 猶^ラ 可^ク 以^テ 雲^ヲ 放^ツ 此^ノ 身^ヲ

○評云此歌ハ灯^ノ花^ノ詩^ニ最^ニ取^リ在^リテ天^ノ和^ノ比^ヲ作^リト誠^ニ二篇^ノ備^フ
 躰^ヲ見^ルハ趣^ハ漢^ノ家^ノ詔^ノ脉^ナカ^ラ意^ハ大^ニ和^ノ風^ノ後^ト云^フ然^レハ
 此^ノ類^ノ格^ヲモ傳^テ和^漢通用^ノ鑑^ト成^サハ此^ノ文集^ノ採^ララ^レ
 例^ニ詩^ニ最^ニ取^リ中^ヲ透^ス来^テ此^ノ一^ノ篇^ヲ出^セル^ナリ^ト子^ハ趣^ノ意^ノ

差別^ヲ考^テ黄^白ノ筋^ヲ恐^キナ^リ練^漚ハ但^シ多^ク情^ノ様^ニテ
 旅^亭ノ病^懷ヲ字^セル^ニ野^盤ハ先^師ノ名^ナカ^ラ竹^宿水^持ノ
 意^{ヨリ}起^ク句^ヲ我^ノ名^ヲ喚^出セ^リト^ノ右^ハ本^集ノ題^註ヲ按^スル^ニ
 此^ノ歌^ハ吳^融カ益^シ山^中歌^ノ如^ク七^六ノ句^法ヲ用^テ三^ノ所^ノ發^語
 ハ例^ノ樂^府ニ效^ヘリ然^レ古^文ノ歌^曲ヲ見^レハ五^七ノ詔^路ハ和^漢
 ノ恒^例ニテ或^ハ九^七ノ長^短アリ或^ハ五^七ノ長^短アリ假^名ニ詔
 路^ノ拍^子ニ合^ハス又^テ音^韻ノ差別^ニテ和^漢ノ字^向ノ遠^近ノ
 ナハ先^師ノ詩^序ニ云^フル^ニ如^ク趣^ハ漢^語ノ字^面ヲ飾^ルル^ニ意^ハ
 和^詩ノ風^俗ヲ夫^レ下^ラス然^レ詔^路ト音^韻ノ沙^汰ハ譬^言ハ官^相
 江^州ノ智^{アル}モ我^朝ノ土^地ニ素^達スル^子者^ハ漢^家ノ飯^燒ノ無^兼
 筆^ニモ劣^リテ詔^路ノ長^短ト音^韻ノ叶^不叶^ハ皆^々推^量シ^テ各
 ナハ返^スクモ我^朝ノ字^者ハ假^名ト直^名トノ通^用ヲ知^リ

○辨類

聖人オモクニ辨

沃庵和尚

日向アケルユロホヒち却り来て天見アマミ神カミ波ナミ
美トモ茂シホち奈ナ物モノ遠トホ柳ヤナギ 暮ヨル緑キナンド
耳ミミ了シラセ 在アリ波ナミ々々 々々 々々 々々
色イロ能ス弄ユメ

戲シ之シ之シ 魚イサ好ヨク了シ 々々 々々

○評云此一字平重人ニ通ト夢ト云ハ凡古語四字ヲ題ニシテ
此字躰ニ書置玉ルラ多ニ辨ノ一字ヲ添テ文採ノ飾ト

成セリケリキ去キ六ム世ノ文ノ抑子ヲ評セハ或ハ万葉ノ旋頭歌ニ作
ス或ハ庭訓ノ直名文ニモ作ス世等ヲ大和ノ辯ト名附テ例ニ
文採ノ新製トヤ云ハ誠ニ世和尙ハ世ニ勝テ其文ニシテ其實
ナル多ニ好事ノ以流ヲ見ト其世ニ俳諧ヲ勸ケル本意ナシ

虫辨

并序

苗字陀

海ノ館ノ城ありト也ト其國ノ仲ノ也ノのノりノ富士ノ
もありノのノりノ中ノまノねノるノいノきノらノしノ様ノなりノや
宵ノ中ノノノ茶ノ向ノとノかノすノいノとノ熱ノるノカノもノあノりノ
のノりノ雪ノ舟ノ雪ノ村ノのノよノしノらノもノあノりノのノ歌ノ

月夜にありあるおひそなけうあつとまきつゝか惚の
垢といわゆる比やの意をうつ。塵はのりて山姥の
物といふもあまふたれ山姥にほれりるをせはく
山姥はあつとまきつゝ月てる。寛北茶あふ舞はあつと
あつと脚布のまきつゝとらあつと海へ横原の雲は
まきつゝわづらひのあつとまきつゝあつとまきつゝ
まきつゝあつと猫と我食の天あつと特の山姥あつと
ひかりいそれたの山姥を角くしあつとまきつゝ
不意の命とまきつゝりし有る特あつとあつとあつと
乱の熱湯とまきつゝとあつとあつとあつとあつとあつと

袴はあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
の袖もあつと。座の山姥はあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

其辭

秋のおきむと何ういふも 正の山姥はあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

表_レ辭_レ頭_ヲ葉_レ裏_ヲ辭_レ樹_ヲ與_レ故_ニ誠_ニ運_ニ和_レ溪_ノ之_レ情_ヲ而
復_ニ無_レ感_レ慨_ヲ耶_今將_レ不_レ佳_レ吉_之和_レ歌_共將_レ競_ニ
文章_之哀_與也_熟思_レ人_之遊_世則_同好_レ花_鳥
鳥_之色_ヲ耳_樂絲_竹之_聲了_棟其_香了_調
其_味了_此四_者實_謂意_之馬_車矣_乍左_有
此_四者_善用了_則為_樂人_了惡_{用了}則_為
苦_人了_物皆_謂一_得一_失者_矣于_然謂_人
向_之遠_物者_貴賤_武夫_麼商_人麼_有
日_々夜_々之_用而_與歡_了口_齡了_令樂_人
了_共無_了令_苦人_事爾_連受_過世_人者_眠花

了_醉月_了盛_時尔_者不_樂其_甚衰_日尔_者
苦_此甚_不知_生則_何知_死與_者孔_子麼_所
宜_給甚_之事_也尔_奈何_所故_人之_思違_而
耳_同者_為不_病日_之用_心共_甚者_不思_不
衰_時之_養生_矣爾_人之_嚼老_而老_曾林_之
夕_崑為_敬一_葉之_秋則_葛之_每葉_動初_鼻
矣_荻之_上葉_麼以_洩而_物言_則笑_了童_部
了_物喰_則慙_通給_司了_何歎_老身_之爾_者
有_見苦_耳副_同副_不似_于甚_矣好_夫
所_謂人_者髮_容了_共伊_勢海_蜚之_不樂_之深

磨有令意墨漆之尼撮共為畫之技牙者
不真爽而曉之漆寢磨有物牽牙扣社人
之為意也飾耳了耶瑳鼻止耶畫者誘引
謂伊達之花矣止左者在共觀物之采落
了則各磨被環摺針之砂而某所有鏡之
山則沐梅花之油居嗽揚枝之薰而昨日
者貴於夜光之璧了今日者賤如夕與之
核了何之采落如斯也耶朝顏者花之假
也共不似生而見憂同人要昔手佳了雉
子之香而不異鬼之嚼煎餅了今也馴入

豆腐之味而為似蝶之掌牡丹了斯遠離
老之声色也則畫已將為明暮之樂厚哉
我若魚同則隨魚而令管絃之中遊心矣
我若魚耳則隨魚而可書畫之圖置身矣
實夫在世而無畫則且了有而味之膳共
夕了有八珍之菓共熬令悅老之同而所
宜給心造罪非施餓鬼之誠要耶我今悔
一畫之過而誨而世之人了則可畏飲食了
不志酒色了身者所采若松之綠共心者
黃及老木之葉迄厭入身秋之凡而從鷹

之格ツクム一羽ツラ麼モ從ヨ蘭ノ之ツチ培カフ二葉ニ麼モ彌イ疾ト詩ヒ一
 齒ノ之レ價ハ而レ不レ換ハ千兩ノ之レ黃コ金カ了レ哉ヤ在レ連サ換ニ
 月花ノ之レ以ニ色ニ而レ貪ラ魚ノ身ノ之レ以ニ味ヲ則レ從ニ詩歌
 連歌可賤見了共聖帝之詞今麼人者以
 食ヲ為天與手兼好法師麼徒玉卮者以飯
 思意味敷則哉書置流石之竹常泉矣於
 然人之志齒也則可厭者謂志來而歎耶
 誠為忘天人也正

○評云此題ハ白氏文集ニ出テ樂天カ老妻歎上ラ灯花詩取
 感ノ一字加テ大和真名ノ辭ト成セリ去リヤ佛家ノ

經說ニ眼耳鼻舌身意六根ト云ク色声香味觸法ヲ
 六欲ト云テ園通ヲ詭テハ其利益ヲ勸メ執着ヲ誡メテ其
 損害ヲ懲ラス六根ハ但レ善惡ノ二相ト云シ然レモ此齒ノ用
 々ヤ四支九竅ノ働ニ勝リテ日夜ニ人ヲ利スレ臣御物ヲ害
 スレ夏ナレ況ヤ老後声色ヲ離レ六欲中ニ何ヲ樂シ去ルヲ
 儒書モ仁經モ此齒ノ住ヲ稱セテ強テ耳目ニ難附テ齒
 ニ千金ノ價ヲ争ハル多ク文章ノ意地ト知リ佛語ノ筆格
 ト知キナリ誠ニ篇ノ以流ヲ稱セハ老僧ノ段三和音婉曲ヲ
 寫シ摺針ノ段三佛語ノ談笑ヲ令シテ中比ハ俗ノ文細ナレハ
 管絃ト書ト二月同ヲ讓汰テ齒ニ老後ノ自用ヲ奪ルニ
 前ニ孔子ノ死生論ヲ合セ後ニ秋菊ノ餓鬼道ヲ引キテ
 儒仙ノ證文ニ文章ヲ固見タん増テ雁鳥羽ト蘭葉ハ和訓ニ

畫字ノ御音十ハ本ヨリ六書ノ例ニ效ヒテ和漢ニ假借ノ絶如ト称
 スレ然ルニ一篇ノ結段ハ例ニ連飾ノ敵詞ヨリ各ニ遇フ書經ノ
 帝範ヲ引テ天ノ字ニ万人ヲ誠スル誠ニ理論ノ虚矣ト云イ誠
 ニ文法ノ死活ト云イ和漢ニ假名真名ノ自在ヲ得テ世等ヲ
 文採ノ本懐トヤ云ハシ字人ハ文字ノ置所ヨリ句讀ノ長
 短ニ眼ヲ留キナリ

 六書ノ例ニ效ヒテ和漢ニ假借ノ絶如ト称
 スレ然ルニ一篇ノ結段ハ例ニ連飾ノ敵詞ヨリ各ニ遇フ書經ノ
 帝範ヲ引テ天ノ字ニ万人ヲ誠スル誠ニ理論ノ虚矣ト云イ誠
 ニ文法ノ死活ト云イ和漢ニ假名真名ノ自在ヲ得テ世等ヲ
 文採ノ本懐トヤ云ハシ字人ハ文字ノ置所ヨリ句讀ノ長
 短ニ眼ヲ留キナリ

文採卷之二終

蓋し此の如きこと六書の六書の如し和漢ニ假借ノ地ニ
スレども一書ノ終限ハ例ニ違フ人誰シヤ云々
帝紀ノ有リ夫ノ至ル人ノ扱ヒテ誠ニ理論ノ麗堂ト云フ
其体ヲ死小ト云フ和漢ニ假借ノ地ニ在ラ得テハ
文解ノ本體ト云フ其ノ字ハ直斯ヨリ自註ノ長
短ニ依リテ定ムル事ナリ

大藏經卷之三十一

